

「万人の救い」(ローマの信徒への手紙一〇章五〜一二節)

1 ユダヤ人の救い

ローマの信徒への手紙は晩年のパウロによって書かれた重要な手紙です。とくに今日の聖書の箇所をふくむ九〜十一章の三章では、彼の他の手紙には見られないテーマがあつかわれています。それは、イスラエル、すなわちユダヤ人の問題、彼の救いの問題です。

どういふことかという、本来、彼らユダヤ人こそ、神の救いに真つ先にあずかるべき民でした。聖書の神とは彼らの神であり、彼らこそ神の民です。神の民であることは昔も今も変わっていない。しかし彼らは神が彼らの救いのためにつかわした救い主イエスを受け入れなかった、それどころか殺してしまった、十字架につけて殺してしまった。さらに、そのことを反省し、悔い改め、あらためてイエスをメシアとして受け入れたユダヤ人が最初はおおぜいたのに、だんだんそういうユダヤ人がいなくなってしまった。パウロがその伝道活動において経験したことは、従来ユダヤ人から神なき民として、したがって望みなき人たちとしてさげすまれてきた他の民族の中からキリストを救い主として受け入れる人がつぎつぎに起こされているのに、ユダヤ人たちはますますかたくなになってメシアとしてのイエスを拒否しつづけている、あまつさえキリスト教徒を迫害しているという事態でした。こうした経過の中で、とくに異邦人キリスト者の中に広がっていたのは、かつて神がユダヤ人に与えた救いの約束はどうなってしまったのだろうか。反故にされたのではないだろうかという疑念であり、われわれは信仰によって救われたけれども、ユダヤ人は捨てられてしまったのだと決めつけるような考えでした。

九〜十一章のテーマがユダヤ人の救いの問題だというのはそういうことです。パウロはユダヤ人です。神の民としてたくさんの恵みを受けてきた同胞ユダヤ人のそうした現状は、彼の心の絶えざる悲しみであり、はげしい痛み以外のものではありませんでした。九章を彼はこう書きはじめています。

わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています(9:1-3)。

この直前、八章の終わりに、神の愛からわたしたちを引き離すものは何もないと確信を込めて記したパウロは、同胞のためなら、彼らの救いのためならわたしがキリストから離され、捨てられてもよいとさえ言っているのです。それほどにユダヤ人の救いが彼のこのころの大きな部分を占めていました。

この三つの章でパウロが結論的に言っているのは、神の民イスラエルに対する神

の真実は変わらない、救いの約束は反故になっていない、その変わらない憐れみのゆえにユダヤ人は救いにあずかるのだ、その憐れみにより異邦人もその信仰によって救いにあずかり、神をほめたたえるようになるということです(15:89)、この結論を見失わないようにしたいと思います。

2 掟によっては不可能

さて万人に救いの道が開かれています。それはどのような道なのでしょうか。そしてそれを私どもはどのように歩めばよいのでしょうか。

ここに二つの救いへの道が対照的に示されています。一つは「律法による義」の道です。もう一つは「信仰による義」の道です。

「義」というのは正しさ、神の前で通用する正しさという意味です。簡単に救いと言い換えてもよいと思います。ですから「律法による義」とは、律法、神の掟、戒めを守ることによって神の前に正しいとされる道です。「信仰による義」とは、そうした自分が何かを守ることによって、そうしたわざ、行いによって、ではなく、神が示してくださったキリストによる救いを信じる、受け入れることによって神の前に正しいとされる道です。いわば信仰における業績達成的な生き方を放棄する道です。万人に開かれている救いの道はこの「信仰による義」の道です。

「律法による義」は人間に救いをもたらさない。それはなぜでしょうか。一〇章五節を読んでみます。

モーセは、律法による義について、「掟を守る人は掟によって生きる」と記しています(5節)。

これはそのままではありませんが、旧約聖書の「レビ記」からの引用です。掟とというのは、知っているだけでは何にもならないのであって、これを守り行うことがなければなりません。

つまり行うことによって「生きる」のです。行う人は「生きるであろう」。その人は神の前に正しい、すなわち、最終的に救われる。いま現在行うことが将来救われることの保証となる。かくて律法によってであれ、掟によってであれ、行うことができれば、それを条件として、人間は救われるのです。それがモーセを通して与えられた神の約束でした。

しかし現実はどうだったのでしょうか。ユダヤ人の生活と歴史が証明していたことは、人間には掟を完全守ることはできないということでした。私ども自身のことを考えてもよいと思います。パウロがこのローマの信徒への手紙七章で人間の「むさぼり」の問題を取り上げていることを思い出してよいと思います(7:7以下)、「むさぼるな」(十戒の十番目の掟)という命令を人間は守ることができない。この言葉を聞かされた時に、むさぼりの思いが自分にあることに私どもは気づかざるをえない。神の要求と私どもの現実の「へだたり」を正直な人間なら認めないわけにはいきま

せん。そしてそれに気づいたとき、私どももパウロと同じく、自分が望むことは行わず望まないことを行っている(7:15)と、絶望的な思いにかられざるを得ないのです。

それでも私どもが、守ることができる、行うことができると思えたら、それは自分にうそをついているのであり、守り行うことを私どもの能力の範囲内にあると考えているわけですから、それはやがて、神に対し、また他人(ひと)に対し、ひそかに自分を誇ることになるのではないでしょうか。こうして私ども人間が根本のところでは罪人であること、罪にとらえられていることが、それによって明らかになることとなります(7:17)。律法の道は行き止まりです。私どもが罪に支配されているかぎり、神の掟に、神の思いに満足に沿うことはできないからです。

しかし「律法による義」が人間に救いをもたらさないのはたんに人間的な理由によることではない。むしろ根本的には神ご自身がキリストによってその道に終止符を打たれたのです。「キリストは・・・律法の終わりとなられた」(四節、口語訳)とあります。「律法による義」の道に代わってイエス・キリストご自身が「信仰による義」の道を開いたのです。六〜七節です。

「心の中で『だれが天に上るか』と言ってはならない」。これは、キリストを引き下ろすことにほかなりません。また、「『だれが底なしの淵に下るか』と言ってもならない」。これは、キリストを死者の中から引き上げることになります(6-7節)。

これは申命記(30:11-14)の一種のもじりです。簡単に言えば、イエス・キリストがその生と死と甦りによって「信仰の義」の道を開いたということです。陰府にまで降った神の子イエスは死と闇の世界の中から甦ってすべての人に救いの道を、唯一の救いの道を開いたということです。

3 言葉は近くに

今日の聖書箇所が私が一番興味深く思ったところ、あるいは少し分りにくかったところは、こうした信仰による救いの道、言い換えれば、キリストを信じキリストとともに歩む道は、どこか遠くではなく、私どもの「近くに」あると言われているところなのです。

では、何と言われているのだろう。「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたのところにある」。これは、わたしたちが宣べ伝えている信仰の言葉なのです(8節)。

「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたのところにある」、この引用はもともと旧約聖書の申命記です。パウロにとって、この言葉は、信仰による義

の道を歩もうとする私どもの現在を理解する絶好の言葉だったようです。私どもの近くとはどこでしょうか。

じつさいキリストは世に來られた。そしてキリストはそのみ業をなし終えて天にのぼり、そこで私どものためにつねに執り成しをなし、私どもを恵みをもって支配しておられる。でも、天ならやはり私どもから「遠い」のではと、あるいはお考えになるかもしれません。

この申命記の言葉を思い起こしながらパウロは救いの言葉は私どもの近くにあるというのです。キリストはどこにおられるのでしょうか。天にあげられ父なる神の右に座したもうキリストは聖霊の力において私どもの福音の証しにおいて、福音の宣べ伝えにおいて、私どもの信仰の告白と賛美の中におられるというのです。「近くに」という言葉は、こうして私どものこの礼拝という場面を想定してでなければ理解できない言葉です。天におられるキリストはこの礼拝において近くにおられます。私どもとともにおられるのです。

そうした私どもにとって、このイエス・キリストが私どもとともにおられるというとき、どうして掟を守ることが第一の問題となることがあるでしょうか。キリストは律法を生きられた。神を愛し他人（ひと）を愛して生き抜かれた。この方が、だから君たちもわたしを模範として律法を生きなさい、掟を守りなさいと、言うことは決してないのです。

そうではなくて、わたしを信じ、わたしを受け入れ、わたしとともに生きなさいとイエス・キリストは語りたまいます。イエスは私どもに道徳的な模範を示したのではなくありません。私どもも掟を守るためにがんばらなければならないというのではないのです。律法はイエス・キリストが生き抜いて、成就し、それゆえそれを廃棄されたのです。イエス・キリストとともに私どもが生きるならば、それは神のみこころにそって私どもが生きることになります。なるほど私どもの生き方は欠け多く貧しいものです。それでも、イエス・キリストとともに生きるならば、それは神のみこころに従って歩むことになるのです。

「信仰による義」の道が、私どもに差し出されています。私どもは感謝をもってそれを受け取りその道を歩むことが大切なのです。そうすれば私どもは救われます。それは決して失望に終わることのない道です（二節）。それが万人に神が示した救いの道です。「ユダヤ人とギリシア人の区別」（二節）はない。この最大の区別はないのです。万人の救い、それはキリストにおいてみんなが救われるということです。昔からキリスト教には万人救済説というものがあります。私がいま申し上げているのはそういうものではありません。キリスト抜きであるかぎり、そうした説はいささか楽天的にすぎる考えです。そうではない、万人を救うイエス・キリストという方がおられるということです。「イエス・キリストにおいて」、この一事を私どもは忘れてはならないのです。

（二〇一八年九月二三日）